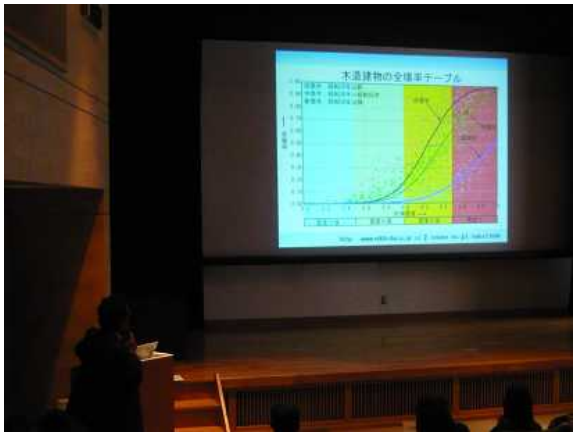
# 防災公開講座(しずおか防災地域連携第 22 回土曜セミナー)

平成 21 年 12 月 19 日(土) 13:30 から
静岡県地震防災センター　ないふるホール

テーマ　　「静岡発　防災ボランティアの広域連携のための図上訓練プロジェクト　事始め」
講　師　　小村　隆史　富士常葉大学環境防災学部

※　聴講者数　５０名



# 静岡発　防災ボランティアの広域連携のための図上訓練プロジェクト　事始め

富士常葉大学環境防災学部　　小村　隆史

「静岡と言えば　防災の世界では　まずは自主防災組織」

この理解は正しいが、防災ボランティアの分野でも、静岡県は最先端を走っていると言って良い。ただし、その「最先端を走っている防災ボランティア」の姿は、多くの人が持っている防災ボランティアのイメージとは、実は多少？かなり？異なっているかもしれない。

毎年２月、東海地震の発生を想定し、全国の防災ボランティアの猛者達と県内の社会福祉協議会や防災系ボランティアの連携のため、図上訓練が行われている。２０１０年２月で第５回となるが、防災ボランティア界の一大イベントであり、内閣府防災担当も大変関心を持っている訓練である。私はこの訓練に、最初の２回はオブザーバーとして、第３回からは監修者として携わってきた。その中で、またあの阪神淡路大震災からの１５年の歳月を経て、防災ボランティアの新しい姿が見えてきたように思う。

防災ボランティアというと、多くの方は、混乱期に颯爽と現れて捜索救助活動を展開し、あるいは避難所や仮設住宅を巡って被災者を支援してくれる「外からの力」をイメージするであろう。確かに「切った・貼った・縫った」段階での外部からの支援は、被災者に「私たちは見捨てられてはいないのだ」ということを実感させるものではあろう。しかしながら、私が監修する静岡図上訓練では、実のところ、この部分（＝災害応急対応の部分）は重視していない。では、その代わりに何を重要視しているか、を問われるならば……。

配布資料からご理解いただけると思うが、静岡図上訓練の一つの特徴は、徹底して地域理解に力を注いでいることにある。地域の基本的な特性（自然＋社会＋ひと・くらし・つながり）への理解抜きに、「ああなったらこうする」を語ることにどのような意味があるというのか。静岡県が全国に誇る第三次被害想定をしっかり読み解くこともせずに、何が災害応急対応であろうか。三想定でどこはどのくらい揺れるかはわかる。その揺れで建物がどのくらい崩れるかは、過去の経験・教訓が全壊率テーブルに整理されている。これらを用いれば、被害は先読みできる。そして「予防に勝る防災なし」である。予防策を講じ被害を減らすための方策を語らず、その部分を抜かしていきなり対応策を語ることが、防災の本質を突いたものとは私には思えない。それゆえの、徹底した地域理解重視なのである。

さらに、静岡図上訓練では、阪神淡路大震災の教訓情報資料集を読んでおくことを、参加者への事前課題としている。先読みが出来るなら、予想される事態を織り込んでの仕込みも可能となる。「未曾有の事態に……」とは、不勉強者の言い訳に過ぎず、過去の大規模災害において、時間の経過と共に被災社会と被災者のニーズがどう変化していったかは、それなりの資料に残されている。泥縄的対応の愚に陥らないためには、ニーズとその変化の理解つまり先読みは不可欠のはず。静岡図上訓練では、この点についても参加者にしっかりとしたイメージを持ってもらえるよう、訓練企画を工夫している。

近い将来、程度の差こそあれ、県内全域での被害が想定されている静岡県であり、その日までに、予見され得る被害については、その可能性をどれだけ潰しておけるかが最重要課題である。そのためにも被害様相の理解と被災社会・被災者のニーズの変化を理解しておくことがいかに大切かは、一般の方にも防災ボランティア初心者にも、比較的容易に理解してもらえると思う。静岡図上訓練の特徴は、このような、いわば地域防災や自主防災組織の基本にもつながる部分に、かなりの力を注いでいる点にある。

被害軽減に向けた予防の努力は当然として、将来の被災を織り込み、外部の支援を効率よく受け入れ、より速い地域の復旧・復興につなげていくためには、平素はどのような取り組みをしていけばよいのか。これはこれで大きな課題である。そこで、第４回からは、援助を受ける、あるいは援助を活かす力（または技）を意味する「受援力」をテーマにかかげ、受援力を高めるとはどういうことなのかを、参加者同士で議論していることも、静岡図上訓練の大きな特徴でもある。

援助する側とて、自らは何もせず、（外部からの）ボランティアに丸投げし、何でもしてもらえると思い込んでいる（思い上がっている？）ような地域や人々に対して、手を差し伸べたいとは思うまい。「天は自ら助くる者を助く」とは良く言ったもの。実は、受援力（援助を受ける力・活かせる力）とは、地域の有形無形の資源を平常時にどれだけＤＩＧ（掘り起こす）しておけたか、にかかっている。また、援助の手を差し伸べる力や技（支援力）も、平常時にどれだけ「顔の見える関係」を作っておけたかにかかっている。つまりは、豊かな地域の関係性があればこそ、外部からの支援も活かせるのだ、ということになるのである。

このように考えてみる時、防災ボランティアについて議論することは、実のところ、地域を語ることに他ならない、ということが理解されよう。静岡図上訓練プロジェクトの面白いところは、このように、防災ボランティアの原点は、実は地域に帰れ、ということにあるということに気付かせてくれたところにある。そう考えてみるならば、防災ボランティアの新しい姿、とは、実は、古くて新しい姿、と言うべきなのかもしれない。